

さぶちゃん  
奮戦記 ①

菅原工務店創業物語

はじめに

「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世の中にある、人と栖すまと、またかくのごとし」。儂はない人生の無常をうたった鴨長明(1155頃〜1216)の名高い「方丈記」の一節を引いた。

鴨長明は「人と栖」の無常を主題とし、仏教に照らして内省を深めたエッセーで人間世界の無常をまとめあげた。今回、菅原工務店取締役会長・菅原三郎さん(69)の自叙伝を取り上げることになり、冒頭に浮かんだのが鴨長明の「方丈記」であった。菅原さんは、少年時代にふるさとの花川(色麻町)を遊び場にし、美しい自然に包まれて育った。

鴨長明は平安後期から鎌倉初期に活躍した

随筆家、文学者。六十一年の生涯で、安元三年(1177)の大火、治承四年(1180)の辻風と福原遷都の混乱、養和元年(1181)の飢饉、文治元年(1185)の大地震と、人災と自然災害に見舞われた波乱の歲月を送った。

平成二十三年(2011)三月十一日午後二時四十六分、東日本大震災が発生、死者、行方不明者は二万人を越し、家屋倒壊、社会インフラが寸断され、生き地獄を体験した。

## 団塊世代も「古希」迎え

さらに東京電力の福島原子力第一発電所が巨大津波に襲われ、大地震の後遺症が続ぎ、恐怖から解放されていない。今から八百三十二年前にも大地震が発生したことを鴨長明は「方丈記」に克明に記録し、その五大災厄の見聞体験と美感にもとづく描写を高く評価された。これが教戒の文学とも言われる。

冒頭の一節を現代風に訳すと「行く河の流れは絶えることがない。しかし、流れる水そのものは、つねに入れかわっている。また、

流れがよごんで渦巻く所に浮かぶ水の泡は、あわただしく生滅して、その姿をこどめることもない。世の中の人も栖も、はかないことも、これとよく似ている」ということとなる。

特に「人と栖」という表現に、うつろいやすい人間世界と、人々が暮らす住処すまか、住家すまかを「栖」と表現し、その意味に注目した。菅原三郎さんは、大工職人の見習いから数々の試験を乗り越え、腕一本で鍛え上げて建設業で

人生を切り開いた立志伝を持つ人だ。平安後期から鎌倉時代に生きた鴨長明は、平成の世と変わりなく、出世街道から遠ざけられ、心に綴った「方丈記」や「無名抄」「発心集」全八巻、「千載集」などが後世に残され、現代の人達にも大きな影響を与えている。

平成の世は少子高齢化がハイピッチに進む。特に戦後のベビーブームで誕生した団塊世代が古希を迎え、高齢層の増大に拍車がかかる。第一線を退きつつある団塊世代は、平

自宅を訪問し、菅原さん(右)に家系図など資料を提供してもらう



成の世にはない「昭和元祿」といわれた良き時代を謳歌おうえいしたことが唯一の慶ゆきび。青春に悔いなしと。小社は「地域とともに」をモットーとし、東日本大震災の復興と相俟あひまって昭和元祿の再来を望み、地方創生を高らかに叫び、富県宮城をめざしている。 <伊藤>